

人間、この非人間的なもの



なだいなだ

筑摩書房

人間、この非人間的なもの○なだいなだ

なだいなだ

1929年、東京に生まれる。慶応大学医学部卒業。

作家。精神科医。

主な著書 『パパのおくりもの』（文藝春秋）

『娘の学校』（中央公論社）『れとると』（大光社）

『クワルテット』（文藝春秋）『心の底をのぞいたら』

ら』（筑摩書房）



人間、この非人間的なもの

一九七二年三月三〇日 初版第一刷発行
一九七二年六月三〇日 初版第六刷発行

著 者 なだいなだ

発行者 井上達三

発行所 筑摩書房

一〇一九一 東京都千代田区神田小川町二一八

(二九二) 七六五一 振替東京四一一三

印刷 厚徳社 製本 積信堂

©1972

0036-84052-4604

もくじ

それでも、私は人間……………3

残酷と想像力……………29

移りゆく視点からの風景……………56

わかりいそぐこと……………84

ケシカラニズム考……………107

不幸を待つ仁術者………137

鳩に平和がつくれましようか………163

きれい好きな殺人者の手………191

小さい大人と大きい子供と………220

日の丸を掲げる人と

日の丸に掲げられる人………248

装幀・カット 中島かほる

人間、この非人間的なもの

それでも、私は人間

——人間を拡大させるもの、自我を肥大させるもの——



§ 平易な言葉で語れるということこそ、認識の深さの指標である。

——ヴェッセル——

なるべく軽く書きましよう。軽く書いても、あなたを軽くみているわけではないのです。重々しくなど書けないのです。重々しく書けないのは、書く気にならないからです。どうして、日本

では重々しく、評論が書かれるのでしょうか。私は、むかし、ある批評家に、「軽い」という批判をあびせかけられたことがあります。しかしもっと軽く書こうとしている人間にとっては、充分に軽くないことがとがめられるべきなのです。こう書いておけば、お前のエッセイは軽すぎるという非難はまぬがれることができるでしょう。私は、言葉を、事物の重みから解放したい。だから、軽く書きたいのです。

さて、私は、「人間、この非人間的なもの」という、一見、矛盾にみちた表題をえらびました。あなたは、ずいぶんと、私がへそまがりだと思われるでしょう。たしかに、私はへそまがりです。へそまがりだが、こんな題をえらばせたのです。

私は、自分のまわりの人間が、右に行けば左に行き、左に行けば右に行こうと思っています。これが、私の生きていくうえでの、唯一つの原則といえるでしょう。私は、自分のまわりの人間が、全部右に行ってしまうえば、地面が傾いてしまいそんな感じがして、それに釣合うように、自分だけは左に、しかも十人が一步右に行けば一人の私は十歩、左に行かなければならないような気がするのです。一万トン級の船に乗っていてもそうでした。右舷に陸地や、すれちがう船があつて、他の船客たちが、見物のためみなそちら側に行ってしまうと、私は、自分だけは反対側にかけたさねばならぬような気がしたのです。もちろん、一万トンもする船が、それくらいのこと

それでも、私は人間

で、傾いたり、転ぶくすると考えるのはおかしい。それぐらいのことは、わかります。だが、私はそれでも反対側にかけてさねばならない衝動を感じるのです。いつも、一万トン級の船に乗っているわけではないし、小舟に乗る時だってある。その時に、私に反射的に、他の人たちと反対側の方に行く癖がついていないと困る。そんなこじつけの説明を自分にすることがあります。

ともかくも、これが、私のへそまがりの本当の理由であるので、一見、反社会的、反連帯的な衝動のように見えながら、それが、私の他の人々との連帯意識のあらわれではないかと思うのです。

人間は人間であるか、という問いかけに対して、人間は非人間的ではないのか、という矛盾した反問を向けたのは、正直に申して、私のへそまがりの衝動によるものだということを、私も認めねばなりませんまい。しかし、それはそれとして、へそまがりの直観にも、それなりの意味はあるのです。

§ リンゴはリンゴ色

人間は人間であるという主張は、なんのへんてつもないものです。それがあたりまえです。そう、あなたは思いますか。じゃあ、どうして、あたりまえなのですか。

人間的という言葉は、本来は人間に関するという意味ですから、人間に受身的に従属している言葉である筈です。そして、その本来の意味では、人間が人間的でないのが不思議なくらいです。人間が変化すれば、人間的という言葉の持つ意味も無限にふくらんでいくわけで、たとえば、これでも人間なのかという人間ばなれした人間が現われ、それでも彼が人間だということになれば、彼のやることも人間的だといわなければなりませんまい。そこで、はじめて「人間は、どんな場合でも、人間的である」という主張は、なりたつのです。

でも、あなたは、人間的という言葉を、日頃、そのように、非限定的に使っておられるでしょうか。

人間的という言葉に、あなたはもっと輪郭のはっきりした、限定的なイメージを与えているのではないのでしょうか。そこから、問題がおこるのです。

むかし、リングは赤いと相場がきまっていました。だから、リングのほっぺたといえば、それは真赤なほっぺたを意味したのです。そうではありませんか。リングのほっぺたといわれて、あなたは、うらなりのひょうたんのような、あおぶくれたほっぺたを考えられますか。否、断じて否でしょう。ところで、あなたが、今、くだもの店の前に立って、そこに積まれたリングを見たらどうでしょう。そこに、リングは、赤いほっぺたのような色をして並んでいるでしょうか。黄色いリング、あおいリングなどが、はばをきかしているにちがいありません。つまり、リングが

それでも、私は人間

リング色をしていないのです。それと同じようなことが、バラとバラ色についてもいえるでしょう。最近のバラは、バラ色のものが少なくなりました。リング色も、バラ色も、出発点では、リングとバラに結びついていました。しかし、リングとバラの変化に、リング色もバラ色も追いつきませんでした。そして、それらは、バラからもリングからも、切り離されてしまったのです。同じように、人間的という言葉は、もはや人間とは切り離されてしまっており、人間とは無縁なものとといえるのです。リングが、リング色をしていると言えなくなったように、人間は人間的であるとは限らない。いいかえれば、現代の人間は、非人間的であるといえます。「人間、この非人間的なもの」という主張は、こうして、一見矛盾にみちているようで、決して矛盾していないことが、おわかりでしょう。

しかし、リングとリング色の関係と、人間と人間的との関係は、それほど単純に平行しているとはいえません。むしろ、リングは赤かった。リング色であった。しかし、かつて、人間が、人間的であったことがあったのかというと、どうも、そうではなかったとしかいえないのです。人間的という言葉は、人間の認識の深さに従属するものであるべきだと思われるのに、その言葉は、人間の認識の深まりとともに深められようとするどころか、すでに最初の地点から、その認識と切り離され、人間はかくあるべしという希望と結びついたまま、凍結してしまっていたのです。人

間的なものというイメージが、あるがままの人間から離れて作りあげられてしまったのです。

さらに、困ったことは、人間的という言葉は、いい言葉なのでした。この、いい言葉というのが、くせものなのです。

言葉は、そもそも符丁にすぎないし、言葉そのものが、よかったり、悪かったりしても困ります。言葉は、ある事物に対応しているだけで、言葉の価値は、その対応の正確さによってだけ、はかられるべきです。いや、実は、それは、私の希望であるので、現実の言葉は、事物と切り離されて、それほど身軽になっていくれないのです。プラトンやベルグソンは、哲学を、この重い事物をひきずった言葉に従属させないように、努力した人たちでした。逆に事物に対応する符丁である言葉の奥にある事物そのものを、言葉と切り離して、とりだしてみようとしたのです。

しかし、彼らの努力にかかわらず、私たちの言葉は、事物そのものを、まだまだ重くひきずることを、やめていません。そして、人間的という言葉は、善とか、悪とか、真理とかの言葉と同様、そうしたもののびどつであるのです。しかも、それ故に呪縛的な力を持ち、私たちを従属させようと、いどみかかるとです。

「私の著書では、悪という言葉を用いなかった」

といつたベルグソンのようにはいきましますまいが、人間的という問題をとりあげるにあたつては、この言葉への従属から、自己を解放しようという努力なしには、すまされないでしょう。

さて、問題は、人間的という言葉は、それが人間を呪縛する力を持ってしまっているという点にあるのです。人間的という言葉は、人間的人間という虚構のイメージを人間におしつけ、あるがままの人間を、それに従属させようとするのです。まるで、実体が、影に従属を要求されるかのようにです。

私たちは、とかく腹を立てて、

「お前は、それでも人間か」

という、非難をなげつけますが、それは「お前は、人間的人間でないぞ」という意味であり、

「人間は、人間的であれ」、つまり人間らしくあれという要求を裏にかくし持っているわけです。

この要求は非常に正当なものに見えますが、手を失い足を失い盲目になり、人間らしい容貌を全く失つてもそれでも「おれは、これでも、人間なんだ」と主張したい、そしてそう、ひらきなおつて復権要求をしたい人々を拒否する残酷さを持っているのです。いまや、ヒューマニズムという言葉も同じような力を持っているといえるでしょう。

私が「人間、この非人間的なもの」という主張を、ただへそまがりのに、こういう考えも成立ちますよと、消極的に持ちだすにとどまらず、人間が実際に、人間的なものからいかにへだたっ

ているかを、積極的に示そうとするのは、ほかならぬ、そのためなのです。

§ 靴の裏だけの祖国

ああ、言葉、言葉、言葉です。この言葉に従属させられた人間を、人間的と呼ぶべきでしょうか。非人間的と呼ぶべきでしょうか。この言葉の呪縛的な力を、思いださせられる、ゆううつな記憶が、私にのこっています。むかし、ああ、またまたおとぎばなし的な口調になるのを許して下さい、日本と米国との間に、戦争があった頃のことです。その頃、私たちは、「日本」とか「日本人」とかいう言葉に呪縛されていました。変な、面妖な男が私たちの前に現われ、何か彼の氣にいらぬことが、私たちにあり、彼は、

「お前は、それでも日本人か」

という言葉を、それこそ、むやみやたらと投げつけてくるのでした。私たちを画一的なものとしようとする圧力を感じて、気弱な人ならもちろん、かなり気の強い人間も、その言葉に抗して、
「まあ、日本人にも、いろいろあらあな」

という言葉を投げかえすことに、困難を感じたでしょう。

私は、幼年学校という軍の学校にいましたが、そこで「日本には、勝ちめがなさそうだ」と、

ふともらしたことから、「お前、それでも日本人か」とふくろだたきにあいそうになったことがあります。しかし、へそまがりではあっても、私は日本人なのでした。しかし、私では不十分で、更に、彼らに似た日本人であることを強制されたのです。私に、日本人であれと要求した人が、日本人とは何かということを一度でも考えたことがあったとは思えません。彼らには、「お前は、日本人か」は、「お前は、おれと大分変わっておるぞ、好かんやつだ」と大差のないものであったのです。

戦争が終わってから、「日本人」という言葉の呪縛は、一時、消え去ったかのように見えました。そして、さまざまな日本人がいるものだという認識が、私たちを、その言葉への従属から解放しはじめたのです。しかし、一見、矛盾した形で、その呪縛は残されていたのです。

「日本人は、これだから困る」

というような、表現がはげをきかせたことがあるのを、あなたも記憶しておられるでしょう。日本人は短気すぎる。おっちょこちょいだ。表現はどうあれそうしたぐいの言葉は、あなたも耳にしたでしょう。そういう人は、自分だけが日本人でないような口調でした。しかし、それは、日本人にも、いろいろあらあな、といわせるのを拒むという点で、「お前はそれでも日本人か」に正確に対応していたのでした。それが、最近、どうしたことが、ふたたび力をとりもどしてき

たかのように見える、「それでも、お前は日本人か」に、橋渡しをするものであったのです。

しかし、この言葉の呪縛に、日本人のほとんどすべてが、むかしのようにとらわれてしまうことは、おそらくないでしょう。あなたに、もうナシヨナリズムの虚構が認識されている限り、あなたは、それから自己を解放する方法を知っているのですから。

おお、ダントンよ、きみはひどく間違っていた

そのあやまりを、あらためねばならない

靴の底に、足の裏に、

祖国をつけていくこともできるのだ

（冬物語、ハイネ、井上訳）

あなたも、ハイネがダントンに向っていったように、自己の内なるナシヨナリズムへの傾斜に向って、そういうことができるでしょう。

祖国を、靴の底に、足の裏につけていくこと、それはなにも祖国にとどまらずとも、自分が祖国に属しているのだということを知ることです。私が、非日本的になる努力を続けることは、つまり日本人ばなれしていくことは、決して日本人でなくなることはありません。日本人にも、こんな人間がいるということを認識させ、日本人の境界をふくらませることです。それは、日本